

令和6年度 スーパーグローバル大学創成支援  
プログラム委員会（第2回） 議事概要

1. 日 時：令和7年3月19日（水） 14：00 ～ 16：00

2. 形 式：ハイブリッド会議

3. 出席者：

（委員） 浅田委員、岡島委員、小川委員、帯野委員、黒田委員、小林委員、  
日比谷委員、平子委員、正宗委員、三島委員、米澤委員

（文部科学省） 佐藤 高等教育局参事官（国際担当）、庄司 高等教育局参事官補佐（国際担当）  
ほか

（事務局） 水本 独立行政法人日本学術振興会理事、  
小谷 独立行政法人日本学術振興会理事、  
佐々木 人材育成事業部参事、安藤 大学連携課長、豊島 同課長代理 ほか

4. 概要 （※一部非公開議題）

（1）「スーパーグローバル大学創成支援事業」における事後評価結果の決定について

- 非公開議題により、本事業の「事後評価結果」の決定に向けて審議を行った後、各採択大学の「事後評価結果」を決定した。詳細については、日本学術振興会ホームページを参照のこと。

[https://www.jsps.go.jp/j-sgu/jigo\\_hyoka.html](https://www.jsps.go.jp/j-sgu/jigo_hyoka.html)

（2）SGU事業のこれまでの動向やデータ分析を含む成果等について

- 文部科学省より「資料2-1 SGU事業 これまでの動向や成果等 まとめ」に基づき簡単に説明がなされた。詳細については、「資料2-1」に加え、KPIのデータ資料である「資料2-2」を参照のこと。

なお、資料外の10年間の成果として以下の説明がなされ、事業として優れた成果があったことが強調された。（※いずれも2013年度実績 → 2023年度実績）

- ・SGU採択校の37大学で、日本人の送り出しの割合が23%から34%へ。
- ・同様に、留学生の受入れの割合についても、34%から42%まで伸びた。

（3）基調講演：黒田 一雄 委員 『事業総括と今後の日本の高等教育国際化について』

- 黒田委員より「資料3 基調講演 ～SGU事業（総括）と今後の日本の高等教育国際化について」に基づき説明がなされた後、本事業に立上げから中間評価、検証部会等に携わられた経験を基に、以下の所感等が述べられた。

➤ 所感等について

- ・国際化を中心としながらも総合的な大学改革を指向するため、様々なKPI指標が定められたことで、相当の成果があっただけでなく、大学改革の実証実験として、説明責任のある政策実施枠組みとして大きな可能性を示すことができた。
- ・ただし、多くのKPI指標の設定により、数字のみを追求する姿勢の顕在化や実績との乖離、理念や人材観の希薄化といった課題も残した。
- ・本事業は、教育の国際化と質の向上には非常に大きなインパクトがあった反面、日本の研究力の向上というところに対しては、限定的であった。事業の性質上、研究力向上という観点は中心でないことは理解できるが、タイプAを中心とした一部の大学では国際化を通じた研究力向上が模索されており、成果を上げた大学も見られた。大学の国際化の理念として、教育の質向上、及び研究の推進のためだと考えるため、今後より一層、双方の向上に向けて考えていかないといけない。

(4) その他

- 公開議題(2)、(3)の内容を受けて、プログラム委員メンバー及び文部科学省より所感等をコメントいただいた。
- ・10年間という長い事業期間の中で、学長や執行部、組織等が変化していくため、着実にゴールに向かっていくという継続性の観点が難しいと感じる。
  - ・本事業の採択校においては優れた成果が出ており、非採択校との格差が生じてしまったと感じる。全体を底上げするためにも、採択校においてはその他の国際化に関連する常連校となっただけ、日本の大学の国際化を先導していただきたい。
  - ・日本の有力大学には国公立大学が多く、経営という観点やトップダウンで意思決定するというのが弱いと思うところ、本事業の様々な指標の観点でもある、大学のガバナンス改革、あるいは経営層の意識をいかに大学の改革に繋げるかという点に関して、事業期間を通して、トップダウンの施策等が行える体制や意識が浸透したと感じた。この勢いを停滞させず、加速していただきたい。
  - ・事業途中より「ロジックモデル」を導入したことで、事業終了後において、本案件が成功したかどうかわかりやすくなったと思う。アウトプットからアウトカム、そしてインパクトとプロジェクトの自走性について、再度各大学においてレビューを行っていただき、未達の目標を今後どう戦略を立てて達成し、国際化を進めていく

か等を考えて実行していただきたい。

- ・ 選定されなかった大学についても、申請をきっかけに、自分たちの大学にとって国際化を考える機会となった、不採択であってもいったんそこで見直したことは目に見えない大きな成果があったと思う。
- ・ 今後の課題とされている「外国語のみで単位が終了できるコース等が増えたことに伴い、日本企業への就職を考えるとさらなる日本語教育の充実が必要となる。」は、社会が解決すべき課題。産業界で働く身として感じることは、社会が求める留学生、外国人人材とは、日本人以上の日本人のような人材であり、30年前と変わっていない。社会を変えるのは難しいが、発信していくことが大切。産業界のダイバーシティ推進のためにも、発信し続けていきたい。
- ・ 日本人学生にとってのグローバルな環境は理解できるが、外国人学生にとってグローバルな環境とはどういうものなのか疑問に思うことがある。日本の大学に来ることで、世界が学べ、世界で活躍できることが、外国人学生にとってもグローバルな環境だとしたら、キャンパスの中にも、世界さまざまな国と地域から来る各国の留学生、プラス日本人と共に交わりながら学習・生活をするということがまず第一歩であり、その先に外国人学生が日本語を学んで日本の企業に就職するモデルを構築していただきたい。
- ・ グローバルな視点を持っている大学でも、小規模大学にとっては、規模や財源的な問題により、事業に申請することすら難しい現状がある。そういった中で、小規模大学の今後の在り方についても検討する機会となった。
- ・ 継続性の観点において、学生にとって大事なことは、担当者が変わっていく中で教員のみならず、職員も非常に重要な役割を担っていると考える。よって、職員の働きがい、やりがい、学びがいなどが大事だと思う。
- ・ グローバルという環境の中で変化に対応するということと、変えてはいけない不易の部分を学ぶという場づくりが今後、より重要になってくると思う。
- ・ 日本の地方の現状を考えると、地方こそ外国人との共創が必要になってくる時代になってきており、地方の大学の国際化を今後、どうやっていくのかが大きな課題だと思っている。今回の37大学を出島にしないためにも、新しい価値をつくるため、新たな取組みがあればいいなと思う。

- ・今の地政学的環境や、それぞれの世界の環境が非常に激変する中で、10年間の事業終了に伴い、日本の位置付けと、日本の社会や経済の中での大学の位置付けを見直すべきだと思う。
- ・大学はものすごく経済的なパワーを持つ組織であるため、もう少し綿密に大学が社会や経済と連携を取って、今後の日本の社会や経済のためにはどういった人材を放出していかなければならないかという課題が残っている。
- ・自走化の観点においては、戦略性の問題ももちろんあるが、リスクも常に抱えるものである、運・不運も関連したのではと感じる。この部分に関して、さらにより開かれた形で検証していくべきであると考えている。
- ・事業開始前（2013年）の時点で1ドル100円以下だったものが、現在150円前後となっているだけでなく、インフレ傾向にあり、日本の学生が海外に出る経済的且つ競争的障壁が高くなっていることを認識すべきである。
- ・国際化に向けた取組みで、SGU採択大学の中で経験されてきたプロセスというのは、まさに今後、日本社会が経験していくことと同じものであると思っている。日本国内における外国人材、長期在留外国人の恒常的な増加や、日本の少子化による人口減少を考えると、明らかに国際対応力を付ける人材なり、国際対応力のある大学を作っていくことは、今後ますます不可欠になっていく。今後、この事業で経験されたものを踏まえながら、次の時代に向けたところにどう生かしていくのか、各大学におかれても、それから、私どもも含めて関係した者として、また一緒に考える機会というのをいただければ大変ありがたいと思っている。